

衣のNGO

ふるぎみゆくをかいかな?
JFSA

中たかなくらしをささえる
せかいのきあつさをかしたる

NPO 法人日本ファイバーリサイクル連帯協議会
〒260-0001 千葉市中央区都町 3-14-10
TEL 043-234-1206
E-mail jfsa@f3.dion.ne.jp
URL <https://jfsa.jp.org>

会報67号 2025年5月



午後も授業を受けるために第8分校から
本校へ向かう生徒たち



JFSA 会報
バックナンバー



JFSA
ホームページ



JFSA
フェイスブック



JFSA
インスタグラム

▼派遣期間・派遣者及び同行者

前半 4月2日～10日・事務局：依知川守、田邊紀子、中崎亜矢子 監事：増本綾子氏
後半 4月10日～17日・事務局：依知川守、理事：豊島洋氏 ※同行者：藤田和芳氏（オイシックス・ラ・大地フアウンダー）

▼派遣目的に沿った現地活動の報告

1 アル・カイルアカデミーの教育活動の確認

本校と全ての分校、カレッジを見学しました。またセントラルキッチンや、建設中のIT専門学校を見学しました（詳細は9ページの「アル・カイルアカデミーの近況報告」をご覧ください）

2 医療センターの状況確認

医療センターを見学しました。訪れた日も、待合室には10名ほどの患者さんが診察を待っていました。月に平均40名の手術も行なっているそうです。アル・カイルの卒業生のブシュラさん（医科大学に進学、卒



手術を受けた男の子とその家族
「この子は小さい頃耳に棒を刺して怪我をして以来、数年間あちこちの病院で治療を受けてきたのですがきちんと治ることはありませんでした。今回の手術で良くなる事を願っています」と話していた。

業生から初めて医師が誕生しました。会報57号58号でご紹介しています）が医師に就任していました。



（左）ブシュラさん
（右）医療センターの医師

3 P&Jカンパニーとの連帯事業の確認

P&Jカンパニーの借りている倉庫、及び日本のJFSA古着ショップでの販売向けの古着仕入れの様子を見学しました。JFSAの担当者と日常的に連絡を取り合いながら、店舗のニーズに合わせた品物の輸出準備が進められていました。



P&Jカンパニーの倉庫
JFSAへの輸出準備

4 洪水被害地域への支援の確認

2022年の大洪水から今年で3年を迎えようとしています。今回の派遣ではアル・カイル福祉協会が被災地支援活動を行なう3つの村（ブンド村、シール村、ラムザンマツラー村）を訪問しました。

ブンド村では24軒の家が再建され、また生活用水（飲用も可能）を、隣接する村の地下水を汲み上げパイプで引いてきていました。訪問時も村人が次々に水汲みにきていました。この水は村の約1000世帯（約600人）が利用できるそうです。現在、水源の設備に不具合があり水量が少ないですが、近々修理が完了するそうです。

またシール村で9軒、ラムザンマツラー村で11軒の家が再建されていました（会報前号で触れた建設中の2軒の家も全て完成していました）。

村人は「大洪水以降は時々大雨が降る事があり、昨年は約30%の米が流されてしまった。しかし洪水には至っていない。アル・カイルの支援で建てられた家は丈夫で、大雨でも全く問題がなく安心して暮らせています。皆さんの支援に感謝しています」と話していました。今後も引き続き皆さんから寄せられた寄付金を有効に使うため、アル・カイルは現地の村人と相談を重ね支援活動を継続します。



村人は「この村はここまで水没した」と話した



村ではアル・カイルの支援による家(扉や窓が青く塗られていた)に加え、一部政府や他の NGO の支援、または自分の蓄えで建てられた家もある



村の子どもたちは、脱穀して落ちた米を拾い集めて(落穂拾いして)売り、一皿 100 ルピー(50 円位)の小遣い稼ぎをしている



10 歳くらいになると男の子も女の子も農作業の手伝いや家畜への水やりをしており、女の子は家事も行なっている

カユーム氏の所には私たちの訪問を受け、村人から青空学校の再開を願う声が寄せられました。現在村の子どもたちは、数キロ離れた公立校まで通っていますが、教師が来ないなどの問題があるそうです。また通学には危険も伴い、女の子は 2、3 年生、男の子も 5 年生位で辞める生徒が多い状況とのことでした。



バラコートから臨む山並み

5 バラコートを訪問し、現地の生活環境を知る
2005 年 10 月パキスタン北部を襲った大地震では 7 万人以上の方が亡くなりました。当時アル・カイルのスタッフだったカユーム氏(現 P & J キャンプニー代表)の出身地がバラコートだったことから、発災直後からアル・カイルと JFSA は協力して緊急支援を行ないました。また多くの学校が被災したため、アル・カイルは現地で「青空学校」を開校し、村の子ども達を受け入れました。今は青空学校は休校しています。今回は 2018 年以来、7 年ぶりにバラコートを訪問しました。あらためて現在の村人の暮らしや子どもたちの教育の状況を理解することを目的に現地を訪問しました。



(右) バラコート周辺の村からの移住者が多い地域に暮らすシャー・ナワーズ氏(カユーム氏の親戚)
「子どもたちが数キロ離れた公立学校へ通う道は安全ではないし、近隣の私立校には経済的に通わせるのが難しいのです」
(左) カユーム氏

カユーム氏は「子どもたちは小さい頃から学ぶ習慣をつける事が大切です。そして学ぶ事を通してこの社会を変えられるように成長してほしいと願っています。いずれ青空学校を再開したいです。更にこの村から多くが避難・移住したファルーク・エ・アザム村にも学校を作りたいと考えています。そして長い目で見て、村人自身が子どもたちが学ぶ学校を作り維持する事に積極的に関わる意識を持つことが大切です」と語りました。



(右から 2 人目) ムハマド・ラシッドさん 25 歳。
職業はダブリーギ(イスラム宣教師)
青空学校で学んだ青年数名も集まってくれた。中には青空学校から政府の学校へ進学しカレッジを卒業した人もいた。
(左から 2 人目) 依知川事務局

もっと良い教師に
なりたい
卒業生の
ムハマド・アフマドさん



放課後授業の生徒にロボット工学を教えるアフマドさん

「自宅は2部屋で、両親の部屋、妹と自分の部屋、そして炊事場があります。ガスは、急いで朝食を作りたい時などだけガスボンベを使い、それ以外は材木を燃料にしています。電気はきていないので、ソーラーパネルを設置して、主に天井の扇風機と照明の電球に使っています。水は毎月タンクローリー車二分の一程度の量を1500ルピーで買っています。この水は飲めないため洗濯や食器洗い等に使い、飲み水は浄水場で買っています(19ℓ入りのボトルが30ルピー)」

・あなたがコンピューターについて学ぶことになった経緯を教えてください。

「アル・カイルカレッジでは商業を専攻し、コンピューターに触れる機会は殆どありませんでしたが、アル・カイルが企業の支援で開催したコンピューター・プログラミングのコースに、学内から選ばれた6人の中の1人として参加しました。卒業後は会計学を学ぶつもりでしたが、このコースで良い成績を収め先生方から励ましを受けたことで、コンピューターの道に進むことを決意しました。更に知識を身につけるため、今はコンピューターサイエンスの学校にも通っています」

・現在のあなたの仕事を教えてください。

「8ヶ月前からアル・カイル本校のコンピューターコースで教えています。現在は他の担当教師の指導、また放課後の課外活動(※)ではロボット工学やSTEMプログラムを教えています。妹はアル・カイルカレッジの2年生ですが、彼女も3ヶ月前から本校の午後のコンピューターコースで教えています。

実は私は1年半くらい前から、週3日19〜20時に自宅からオンラインでコンピューターサイエンスの

授業(4ヶ月コース)を無料で配信しています。フェイสบックで受講を募り、現在はパキスタン各地の9年生、10年生45名が受講しています」

・なぜ無料でオンライン授業を配信しているのですか？

「私は生徒に教える事自体にやりがいを感じていて、もっと良い教師になりたいという気持ちがあるモチベーションです。良い教師になるためには生徒との友情や親密さ、そしてお互いへのリスペクトが大切だと思っています」

コメント：サード氏(アル・カイルスタッフ)

彼が8ヶ月前に着任した時は、主任教師から「声が小さくて教師には向いていないのではないか？」と言われましたが、これまでに彼は大きく変わりました。6ヶ月後には、現在アル・カイルが準備しているIT専門学校で教えてほしいと思っています。

※課外活動：アル・カイルでは生徒が放課後にテコンドーやアーチェリーのチームに参加したり、Scratchコーディング、STEM教育、ロボット工学などの課外活動も行なわれている。今後も一人ひとりの興味に合わせてすべての生徒が参加できるようにプログラムの数を増やす計画だ。

Scratchコーディング…マサチューセッツ工科大学で開発された。キーボード入力ではなく、画面上のブロックを動かして組み合わせることで、プログラミングを学ぶことができる。

STEM教育…Science(科学)、Technology(技術)、Engineering(工学)、Art(芸術)、Mathematics(数学)の5つの分野を統合的に学ぶ教育手法



アフマドさん(20歳)と妹のアリーバカーンさん(17歳) 「私は10年生の頃、共学の第3分校から新設された女子校の第8分校へ転校しました。共学は男子生徒が女子生徒をイジめることもあって私や家族は心配でした。私は分校で安心と安全、そして自信を感じることができました」

・アル・カイルに通い始めた経緯を教えてください。

「元々、私は自宅そばの無料の私立校に通っていたのですが、3年生の時に閉校されてしまったのです。近所の友人は、自宅から約3kmの所のゴミの野焼き場にアル・カイルが開校した第2分校に通っていました。彼から自宅から比較的近い場所に第3分校が開校されると聞き、3歳下の妹と入学しました」

・以前通っていた私立学校と、アル・カイルの第3分校に違いはありましたか？

「当時は今のように天井の扇風機や照明も無い環境でしたが、先生が放課後も15分位は残って、自分たちの質問に答えてくれたのを覚えています。私は英語や経済についてよく質問をしました」

・両親の仕事は何ですか？

「父の仕事は水道の配管工です。仕事はある時と無い時があり、収入は月平均で1万5千〜1万8千ルピー程です(※1ルピーは約0.5円)。母は主婦です。

今は私がアル・カイルから得る給料で食料費、水光熱費のほとんどを賄っています」

・どのような家に暮らしていますか？

学校と仕事 事務局 中崎亜矢子

初めての派遣で、生徒たちにインタビュールする機会をいただきました。そのうちの一人、ムサツビル君は12歳。第6分校に通う6年生です。良い先生がいるので学校が好き。給食ではホウレン草のカレーが好き。将来の夢はエンジニア。控えめな印象の男の子ですが、答えに迷う様子はなく、真っ直ぐな視線で向き合ってくれました。

学校から歩いて15分の自宅に、家族8人で暮らしています。父親は別の私立校で守衛の仕事をしていて、月収は二万ルピー（約一万円）です。その仕事の合間に、リキシヤ（三輪タクシー）の運転手もしています。母親は学校の掃除の仕事をしていましたが、6人目の子どもが生まれたので今は家にいます。タオルなどを作る工房で働いている兄と、進学の為勉強中の兄、3人の弟妹がいます。弟や妹と過ごす賑やかな放課後を想像するところですが、彼は金曜日以外の毎日、午後2時から夜中の12時まで仕事をしています。

彼が働くのはリキシヤなどを修理する整備店で、2人の職人（大人）と、2人の見習い（ムサツビル君と、同年代の

子がもう1人で切り盛りされています。仕事の合間に軽食を食べたりもするのですが、10時間の仕事の報酬は100ルピー（約50円）です。2年間続けており、ブレーキやクラッチの修理などは出来るようになりました。

彼のように家計の状況をしっかりと把握し、またそれを支えるために働く子どもは沢山いると聞いていましたが、彼の話す様子からは、自分の置かれた状況の中で、なすべきことをなしている、という迷いのなさを感じました。自動車のエンジニアを目指す彼に、アル・カイルのスタッフは技術コース（6ヶ月間で集中的に、知識と技術を身につける）の説明をしていました。彼の置かれた状況やそこで生きる姿が、帰国後も繰り返し脳裏に浮かびます。



ムサツビル君
好きな教科は英語



(右) 中崎事務局
(中央) アル・カイル
スタッフのサード氏

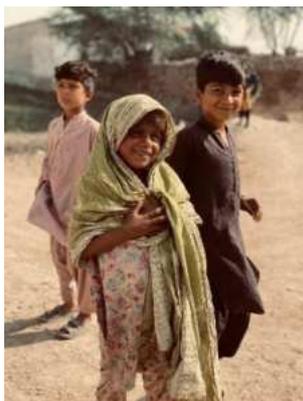
ブンド村の少女 事務局 田邊紀子

洪水被災地のブンド村を訪問しました。2022年の大洪水で村の多くの家屋が倒壊した後、アル・カイルアカデミーがJFSAとアメリカのNGOからの寄付金で復興支援を続けている農村です。計画していた家屋の再建は終わり、あわせて新設した、離れた水源から塩分が入っていない水を引いているタンクも使われていました。ただ、地下のパイプにトラブルが生じ、水は手押しポンプで汲み上げていました。パイプの上は畑になっていたので、収穫に影響のない時期に修理したいと言っていました。

村の中を歩く私たちのそばに少女たちが集まってきて、そのうちの一人の子はいろいろ話しかけてきました。名前はタスバン、年は10歳にはなっていないように見えました。警察官をしていた父親は2年前に亡くなったと言っていました。学校に行っているかと尋ねると、村のすぐ近くにある公立小学校に行っていると言いました。「勉強は好きですか」ときくと返事はなく、もういちど「学校に行っていますか」ときいてみました。



(左) タスバン (右) 田邊事務局



村の子どもたち

すると彼女は、抗議するような身振りをみせながら「ミスをする」と先生が叩く。だから学校に行くのはいや」と言います。あまり学校には行っていないようです。彼女のはきはきした話し方や振る舞いをみると、賢い子なのだろうなと感じました。私たちに好奇心を持って話しかける様子からも、新しいことについて興味を持っていて、行動に移すことをためらわない強さもあるように見えました。

話している間に、私は何度かタスバンに「勉強してください」と言いました。先生に叩かれるからいやだという彼女に学校に行ってくださいとは言えませんが、学ぶことを諦めずについてほしいと心から思います。

フォト ギャラリー

آرام کرنا

アラーム カルナー
休む



故郷のいとこ同士 ～バラコートのケートサラシ村～



ブンド村のカユーム君 2 歳 チャルパイ(木枠の中側に編んだロープを張った寝台、縁台)に座る



少年たち ~ブンド村の飲料水タンクの横で~



車の荷台で ~カラチ市内~

派遣報告 JFSA監事 増本綾子
初めてのパキスタン

初めて、アル・カイルアカデミーに行かせていただきました。

順々にキャンパスを巡るなか、どこに行っても、生徒たちの視線がこちらに向けられ、貴重な勉強の時間を邪魔しているのではないかとという申し訳なさから、少し戸惑いを感じていました。

ちょうどお昼の時間に伺った学校では、生徒の皆さんが給食をいただいている最中でした。男子と女子、別々の列で、それぞれ向かい合って、カレーを食べていました。

すでに食べ終わって、おしゃべりしている女子生徒と目が合い、「アッサラームアライクム」とあいさつすると、英語で「どこからきたの？」と声をかけられました。「日本だよ、知ってる？」と聞くと、首を横に振ります。

どう説明しようか…と思いつつも、パキスタンのいたるところで目にする日本企業の手帳の車メーカーの名前を挙げ、「日本の会社だよ」と伝えると、話しかけてきた生徒だけでなく、その周りの生徒も驚いた表情をしました。そうか…知らない国の知らない人たち、誰だろう？どんな人たちなんだろう？と、生徒たちは興味津々で見ているのではないだろうか…。そう感じた瞬間、向けられていた視線への戸惑いは消え、生徒たちの知りたいと思う好奇心と興味が失われることなく、学びが続いてほしいと改めて思いました。



戸惑いの消えた増本さん

そのあと、階段の下で3人の女子生徒に遭遇しました。どうやら人目につかないところで、お互いの髪を整えているようでした。戸惑いが消えたおせっかいおばちゃん気質で、言葉よりも先に彼女たちの長い髪に手が伸び、三つ編みを手伝わせてもらいました。「大丈夫？これでいい？OK？」というと、笑顔でドウパタ（頭からかぶるスカーフ）を着けて、3人で手をつないで教室に向かっていきました。



生徒の三つ編みを手伝う

現在、アル・カイルアカデミーの事務局や先生には卒業生が携わっています。共にここで学び合った仲間、髪を結び合っていた3人の姿と重なりました。自分たちが学んだ場所を今度は自分たちが支える。アル・カイルアカデミーは単なる勉強する場所ではなく、人々とのつながりを経て、学びの循環をも生み出していると思います。



(右) 卒業生のアフマドさん(4P参照)と本校のコンピュータークラスの先生になっている

最後に…パキスタン情勢が不安定な中、滞在中の安全も無事に帰国できたのも、現地の皆さんのおかげです。そして、彼、彼女らのホスピタリティは積み上げてきた互いの信頼による関係性があったこそです。貴重な経験をさせていただき、心より感謝申し上げます。

本校や第2、3、8分校については前回の会報66号(2025年3月発行)のご報告内容と大きくは変わりませんが、そちらでも報告した医療技術コースの開設準備は着々と進められている様子でした。

スポーツの授業

第3、4、6、8分校ではスポーツの授業があります。まずは校内大会を企画していて、練習を重ねて州大会や全国大会への出場を目指しています。

第8分校では各クラスから選抜された生徒たちがアーチェリーの練習中で、競技を楽しんでいる様子が表情からも伝わってきました。女性の先生はナショナルチームの選手だったそうです(写真右)。アーチェリーは集中力を鍛え、テコンドーは肉体を鍛え護身術にもなるために選ばれています。



アーチェリーを練習する選抜された生徒たち



テコンドーの授業

IT 専門学校

建物の完成まであと一步になっています。建築現場で職人を束ねて仕事を進めているのはアル・カイルの卒業生シャルクさん(写真右下)。



サッカー練習中

セントラルキッチン

敷地では野菜も作られていて、将来的には採れた野菜を給食にも使う予定とのこと。また別棟は食料貯蔵庫や浄水設備(飲料水も各分校へ配達)もあります。



調理中



分校に配達に向かう

◆4月16日の献立◆

第2分校(280名) キャベツとジャガイモのカレーとチャパティ・牛乳

第4分校(380名) 瓢箪と肉のカレーとチャパティ

第6分校(800名) 瓢箪と肉のカレーとチャパティ

第8分校(350名) レンズ豆のカレーとチャパティ



第2分校の給食
この日は子どもたちの大好きなビリヤニ

今回の派遣を通して、アル・カイルアカデミーが様々な支援を受けながら、新たな分校を立ち上げたり、IT 専門学校や医療専門コースを準備していることを確認しました。その事についてムザヒル校長に尋ねると「私たちは医療支援も行なっています。病気や傷を治すことは大切ですが、私は人間そのものが変わる事が何より重要だと考えています。そのためには教育支援、特に幼児から5年生が学ぶ機会を作る事が何より大切なのです。一期生のムハマッド・アリは当時、家庭の事情で中退せざるを得ませんでした。彼は今、家族や近所の人困っていたら率先して助けようとするような素晴らしい人間に成長しています」と話してくれました。



ムハマッド・アリさん(中央)とその家族

『より良い店づくり』

東葛センター担当事務局 古田真大

今年の1月に、1名新しいスタッフが増えました。柏店 kapre(カプレ)は合計7名で新体制として活動しています。スタッフが増えたことで、コロナ後久しぶりのイベント出店など活動の幅が広がりました。それと同時に、みんなで足並みを揃えて物事を進めていく必要があるという課題も増えました。

若い世代の古着ブームもあり、昨年の年間購入者数は一昨年に比べ、1005人増加しており、質の高い接客が求められていると感じました。

そこで主に店頭に立つ新人スタッフと、新たに接客を頑張りたいという2名の、新人研修を3月から行なっています。内容は接客に関する内容をメインにしたミーティング形式になります。2名は kapre で働くまでアパレル経験はなかったです。自分は大学1年生から今まで、9年間のアパレル店員としての経験を活かして、接客の基礎となる部分を教えてきました。

輸入古着は洗濯から値付け、宣伝や販売までが一連の流れになっています。過程一つ一つが接客につながります。例えば修繕が必要なものは修繕してからお店に並べることが必要になりますし、

商品の紹介やコーディネートなどお客様への対応一つ一つが接客につながります。セレクトショップのような販売スタッフとは違った作業があるので、一人一人が接客に関わる、とても責任感が求められる仕事です。始めは接客というものがなにか、理解していない様子でしたが、ミーティングを重ねるたびにそれぞれが成長していく様子が見られました。自分のできることを理解し、やれることをする。まだ2ヶ月という短い期間ですが、着実に一人一人の接客に対する意識が変わり、成長しています。

みんな違った個性があり、形は違いますがその人に合った接客の仕方があって良いと思います。kapre には縫製ができるスタッフや、お客さんと関わるのが好きなスタッフがいて、ワンチームでおお客様への接客を行うことを心がけています。『また行きたい』と思ってもらえるお店作りを目指し、また楽しく働ける場所としても、みんなでお客様をお待ちしております。ご新規さんから常連さんまで大歓迎なお店なので是非遊びに来てくださいね。

居心地が良く、古着を楽しんでもらう空間づくりができるように、これからも楽しくみんなが頑張りますので、今後とも kapre をよろしくお願いたします。



店頭販売を頑張ってくれているメンバーと
完売した kapre オリジナルメイクアイテム



大好評
タペストリーを使用した kapre の縫製スタッフによる
オリジナルメイクアイテムたち



「倉庫側売り場の模様替え」続編」

国内事業担当事務局 大橋 紀子

前回の会報でもお伝えした、売り場の模様替えをその後も継続して行なっています。

倉庫内売り場の天井が高くて広い空間は、とても開放的で良いのですが、模様替えをするにあたってはどこから手をつけて良いか苦戦していました。柏店カプルのスタッフとも定期的なミーティングをし、お互いにそれぞれのお店にも行つて状況を確認しています。買い物に来て、気づいたら夢中になっていて、目的のもの以外もたくさん見つけた・・・というのが目指すお店の方向です。ミーティングでは、全体的にどうしようと考えているのではなく、コーナーとして区切つて考え、その中で陳列を組み立てていくのがやりやすいのではないかとアドバイスをもらい、今はその方法でコーナーごとにテイストを変えて模様替えを進めています(写真下)。

模様替えにあたっては、東京都荒川区にあるリサイクルショップ「あうん」から仕入れた棚や照明などの什器を多く活用しています。「あうん」は、元野宿者や失業者と共に仕事起こしをしてきた団体で、リサイクルショップと便利屋事業などを行なっています。2002年の「あうん」立ち上げの以前からJFSAとは関わりがあり

ます。千葉センターで毎月第2土曜日に行なっている軒先市にも、雑貨類の販売で出店して下さっています。「あうん」で買った什器は商品を引き立てるためにびったりなものばかりで、お客さんにもとても好評です。「棚や椅子は売り物ですか？」と頻繁に聞かれるようになりました。

先日、同じく軒先市に出店している「コーヒール」さんが、軒先市とは別の日にチャルカバザール前に出店してくださいました。常連の方や、ご家族の買い物を待っている男性が買って下さったり、片付けている時に次は間に合う時間に来るわと言っている方もいらしたり、この先も出店してもらう日が楽しみにになりました(今後定期的に出店予定です)。

もちろん、お互いの売り上げを増やすことは目的の一つですが、お客さんが古着を買いに来た時、空間に漂って来るコーヒールの香りだったり、変わった什器を使ったディスプレイが面白かったりと、楽しくて長居したくなる空間、お金で買えるものではないところにある価値や心地よさ、楽しさを一緒に作っていける存在になれ

たらと思います。

最初はほんの少しの隠し味かもしれませんが、だんだんとなくてはならないメインのスパイスになり、さらに様々なスパイスが融合してもっと刺激的になれるように、色々な人との関わりでお店を作っていけると良いと考えています。



「あうん」から仕入れた什器を使ったディスプレイ





第90回コンテナ送り出し

2025年2月27日コンテナ積み込み
積み込み重量 22t594kg
横浜港出港 3月9日

積み込みには千葉ダルク、あうん、オイシックス・ラ・大地、パルシステム千葉組合員、生活クラブ虹の街組合員など30名近い方の協力がありました。今回は、パキスタンで需要の高い毛布1400kgやリネンリース会社様から寄付のあった羽毛布団・布団3450kg、タオル700kg、下着類800kgを特に沢山積み込みました。

千葉ダルクさんは薬物やアルコール依存から回復するための支援施設で、千葉市にある施設から毎週金曜日に古着選別作業ボランティア(有償)に協力がある他、九十九里の施設の農場で作った野菜をJFSAの店舗チャルカバザールで販売しています。コンテナ送り出しには15年ほど前から協力頂いており、毎回20名程のメンバーが参加してくださいます。みなさんのメンバーと場を盛り上げてくれる存在は今や積み込みに欠かせない存在となっています。



積み込み終了後の集合写真

今回の送り出しでは、おそらく10年以上積み込みに参加していて、近々退寮予定となっているYさんがダルクとして最後の勇姿を見せてくださいました。退寮後も積み込みや軒先市(毎月第二土曜日開催)などに顔を出してくれる方もいて、この先も送り出しを続ける中でYさんの元気な姿をまた見られることを願わずにはいられませんでした。



第90回コンテナ到着

2025年4月26日 パキスタン・カラチ

古着卸業者ニアーズ氏倉庫到着

コンテナは到着予定日より、2週間以上遅れて4月18日にパキスタン・カラチ港に到着しました。コンテナの荷物はP&Jカンパニーから卸業者ニアーズ氏に1kgあたり190ルピー(5月20日現在1ルピー=52円)で卸売りされ、売上は429万2860ルピー(223万2287円)となりました。売上から古着代金、海上運賃、関税等の経費を差し引き、およそ100万円が利益となります。



荷下ろしされたボールと卸業者ニアーズ氏

2024年度(2024年10月~2025年9月)の正会員・支援メンバーを募集しています

NPO法人JFSAの会員は次の2種類です

[2023年度 正会員 個人:166名・団体11 支援メンバー 個人:1165名・団体7]

- 1. 会員(正会員) この法人の目的に賛同して入会した個人または団体
- 2. 支援メンバー この法人の目的に賛同し、賛助の意思を持つ個人または団体

●年会費(10月~翌年9月末)

●会費振込み口座(郵便振替)

個人:会員 5,000円 / 支援メンバー 2,000円

番号:00160-7-444198 口座名:JFSA

団体:会員 50,000円 / 支援メンバー 10,000円

※活動への寄付にも同じ口座がご利用できます(通信欄に「寄付」とお書き添え下さい)

会員・支援メンバーの方には、会報(年3回)、回収のお知らせ(年3回)、サポーターグッズ(年1回)をお送りします。正会員の方には総会議案書(年1回)もお届けします。

◆JFSAの会報のバックナンバーをご覧ください◆
ホームページのトップページ中央「会報(ニュースレター)」よりお進みください。ご希望の方には郵送もできます。

◆会報についての感想やご意見をお気軽にお寄せください◆
JFSAまでメール・お手紙でお送りください。
jfsa@f3.dion.ne.jp

こちらのQRコードを読み取っていただくメール作成画面になります。

